



見えてきた神田“中華街”－明治末から大正にかけて

明治大学商学部・教養デザイン研究科教授 鳥居 高様

卓話者紹介

傅 健興会員

鳥居先生は、長年に渡り、神保町を愛し研究を続けられ、資料が少ない中、暗中模索し史実の集大成を作り上げておられます。明治から大正にかけての私たちの知らない神田の姿をお話頂けると思います。

近年、神田、特に神田神保町に中国人留学生による「中華街があった」という議論が高まった。2011年11月には『東京人』(No. 302)が「チャウナタウン神田神保町」を、『散歩の達人』がそれぞれ特集を組んだ。明治大学でも同じ年の創立130周年の際には「神田・神保町地区と手を携えて、『教育』『街』『世界』の凝集した歴史的存在である”神田・神保町中華街“を軸とした各種イベントを開催し、その発見を行う」と位置付け、神保町を中心とした地域での日中交流に焦点を当てた。

さらに、昨年刊行された本学・鹿島茂『神田神保町書肆街考』(筑摩書房)においても、各大学史などの資料を駆使し、神田神保町と留学生のかかわりを大きく取り上げた。

一方、これまで清朝末期以降の中国人留学生に関する研究は日中交流史の文脈において様々な成果を生み出してきた。その成果を大きく分けると、①留学生受け入れの中心的な役割を果たした松本亀次郎自身の記録に始まり、実藤恵秀の一連の研究を嚆矢とし、②1970年代以降、外務省外交史料館における留学生に関する記録資料の公開が契機となって阿部洋を中心とする国立教育研究所グループの一連の研究が存在する。さらに、③近年では大里浩秋・孫安石を代表とする神奈川大学グループの研究、また日中関係氏から川島真の一連の研究が存在する。これらは日中交流史の中での留学生の役割、中国革命における日本の役割などを明らかにした。

鳥居はこれまで、神田神保町中華街に関して、他の中華街と比較した際に、①沿岸部ではなく、内陸部に成立したこと、②労働者ではなく留学生が中心という点で、「世界でも特異な中華街」と位置付けてきた。現在は留学生研究の成果と地域誌との接合を試みている。その際に神田神保町にとどまらず、当時の神田区(現在の千代田区は当時麹町区と神田区)の町の特性と歴史を入れ込

むことにより、その神田中華街の特徴を浮き彫りにする作業を行っている。中でも注目しているのは、商業都市

としての東京である。

結論を先取りしていえば、大前提として「神田区における教育機関の集中」、そのうえでの清国ならびに中華民国の「留学送り出し政策と受け入れ政策」、そこに「商業地区としての神田区」、さらに「印刷業の集積地である神田区並びに麹町区」という特性により神田区を中心とした地域に、ある種の中華街の様相を呈した状況が生まれ、さらに交通機関の要衝としての「須田町」の役割が重要な役割を果たしたことを指摘したい。

本日報告の要点は①どれぐらいに留学生がいたのか：明治末から大正初期の「第1次ピーク時」では1906年の12000人(推定)で、その後いったん急激に減少。急速な変化は日本側の速成科の設置、科举制度の廃止などがあげられる。②留学生の属性は2点。年齢層が多様であったこと、また中国全土からでていること。これは食生活にも翁栄光を与えることを意味する。③留学生はどこで学んでいたのか、それはなぜか?：当時東京市で下宿の2割弱は本郷区で、次いで神田区が多かった。④商業地区としての神田区：そもそも神田区は商業区である⑤印刷業の集積地神田区及び麹町区。

以上から居住区としての神田中華街は可能性が高い者の、当時の料理店としてはこの界限には中華料理店はなく、可能性としては「肉料理店の利用」⑦路面電車の交差点「須田町」を活用した生活が推測される。

閉会点鐘

牛島 聡会長

今後の予定

- 6/13 夜間例会
- 6/20 次年度事業計画書の発表
次年度委員長
- 6/27 最終例会にあたり
牛島会長・青木幹事
- 7/4 第一例会にあたり
奥山会長・山下幹事

創立/1993年10月13日(平成5年)
事務局/〒102-0073 東京都千代田区九段北1-2-2
グランドメゾン九段906号
Tel: 03-3288-7300 Fax: 03-3288-7400
E-mail: ocha-rc@sirius.ocn.ne.jp
<http://tokyo-orc.jp/>

例会日 毎週水曜日 12:30~13:30
例会場 ホテルグランドパレス Tel: 03-3264-1111
会長 牛島 聡 幹事 青木 隆幸
会報 山下 秀一(委員長) 山田 丈夫(副委員長)
土居岩生 木宮雅徳 小林大介 永井一史(委員)